
「あなたじゃなきゃ、だめなの」

佐藤ビー玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「あなたじゃなきゃ、だめなの」

【Nコード】

N 8 7 3 5 A

【作者名】

佐藤ビー玉

【あらすじ】

あなたの笑顔が好き。陽気な性格が好き。優しい所が好き。勉強できない所が好き。かっこいい所が好き。ぜんぶ、好き。

第1話・・・「すき。」

秋の訪れっていうのかな？

周りの木葉は赤とか薄黄色とか朱色とかにすっかり染まって、ひらひらと落ちてくるそれがまるで精霊さんみたいだ。

そんな可愛らしい事を考えている雪野ほのかは、自分が通っている山下高校の門の直前で足を止めた。

大勢の生徒に雑じって一人だけ輝いている（ほのかにはそう見える）、二年C組のクラスメイトで席が前後、柚原太一が目の中にとびこんできたからだ。

誕生日は12月24日、身長は168センチ、勉強はまるでダメだけれど体育は得意、好きな食べ物はハンバーグといなり寿司。

そうなのだ。ほのかは太一に恋心を抱いていた。

あの短くて上に立てた髪形が好きだ。陽気な性格が好きだ。よく笑ってよく食べる所が好きだ。授業中寝ていて、その寝顔も好きだ。

おどおどで常にぼーっとしているほのかだが、やる事はやっている。恋人だとかの話になると全然分らないのに、まだ実っていない恋の話となると興味がわく。自分から切り出したりはしないが。基本的に恥ずかしがり屋だから。

ほのかの身長は157センチで普通。スタイルも特別いい訳でもなく普通。髪形は肩下10センチ位のストレートヘアで、ただ頭がよく学年トップ。

頭脳以外では何の取り柄もないが、どうしようもなく太一が好きだった。たまに挨拶する事もあるが別に仲が良い訳ではない。ただのクラスメイト止まりなのだ。

もっと近くなりたかった。心が。心が。

「えっ…これ、全部ですか？」

最後の授業が終わり帰る準備をしていて、びっくりしながら机の上に置かれたノートの束を指差す。束は三つあり、どう考えてもほのかの力では一度に全部は持っていけない。頑張ってもせいぜい二つくらいだ。

「そうだ、ごめんなあ…今日から野球部の遠征でさ、顧問だから俺早く行かなきゃ…ってすまん！もうバス来たみたいだから行くな！職員室まで頼んだぞ」

「あ…」

苦笑いしながら走り去ってしまったのは古典の教師だ。ほのかはよくお世話になってるから、嫌ではなかった。しかし量だけはどうにもならない。

二往復、するかなあ。

まだ生徒達の声で煩い教室の中、窓際の席ではあ、と溜め息をついた。

「ゆーきのっ」

顔を上げなくとも分かる。ほのかの顔は真っ赤になった。

「…ゆ、柚原くん…」

「おうっ。お前、今からそれ職員室まで持っていくだろ？」

ほのかは心臓をばくばくさせながら、俯いたまま頷く。

「じゃいつちょ手伝っちゃるか！」

よっ、という声と共に、三つのノートの束のうち二つが中に浮く。

ほのかが急いで顔を上げると、束を持って子供っぽく笑っている太一がいた。

どうしよう…。

泣きたい位嬉しい反面、緊張のあまり体が上手く動かせない。

「何やってんだよ？ほらほら行っちゃうぞーっ」

太一がすたすたと歩いて行ってしまふので、ほのかは残りの束を掴んで慌てて追い掛けた。

「そういえば、ゆきのと喋った事ってあんまなかったよなー」

ドキドキが止まらない。憧れの人がこんなに近くに、すぐ横を歩いているなんて今までであったらどうか。

「う、うん」

「ゆきのはさあ、頭よくてすっげえ尊敬してんだぜ！おれなんてほら、ダメダメだからなっ」

そう言っただけで笑う。ほのかは太一のそんな所も好きだった。今思えば、好きになったきっかけなんて本当に些細な事だったのだ。太一がほのかのテストを見て、笑顔で褒めてくれた。ただそれだけの事だった。それから太一の笑顔が好きになり、仕草が好きになり、今ではこんなに想っている。

「ゆーきーのー！何かフォローとかしてくれない訳？」

恨めしそうにほのかを見る太一に、慌てて答えた。

「そ、そんな事ないよ！柚原くんはいつも楽しそうで、みんなの気分癒してくれてるっていうか…その」

太一にこんなに一気に喋ったのは初めてだったので、身振り手振りではのかはかなり挙動不審になってしまう。

そんなほのかを見て、目をぱちくりとさせた太一。

「あはははは！ゆきのと面白いなー。まあいっけどさ、さんきゅ」

あと、と付け加える。

「えーっ？！そんな約束したのあいつと！それで、その後何かあったの？」

興味津々にほのかの顔を覗き込む涼子に、顔を赤くして首を横に振る。

あの翌日の朝。嬉しくて恥ずかしくてほのかはどうにかなくなってしま

いそうだ。

ほのかは涼子にだけ、太一への甘酸っぱい恋心を打ち明けていた。二人は高校入学からの友達だが、もうかなり仲良くなりお互いを信頼し合っていた。

後で知った事だが涼子と太一は幼なじみらしく、家族の様に接する二人が羨ましかった。

「なんだあ…って、おいおい！来たぞっ」

涼子の視線を追うと、そこにはいつもと同じ太一がいて、教室に入ってきた。するとすぐにこちらを向いたと思ったら、近付いてこう言った。

「はよー、ゆきのっ。あと涼子」

「あとは余計よ！ほらほのか、挨拶挨拶！」

涼子に促されて顔がさらに赤くなる。それでも掠れた声で一生懸命口を開いた。

「あ…あの、おはよう…た、太一くん」

「おうっ、おはよう…！」

ほのかの大好きな笑顔がすぐそこにある。

私って、なんて幸せ者なんだろう。

昨日、自分を名前で呼んでとは言えなかった。まだ太一の中に踏み込むべきではないと思ったから。

それでもほのかは、少しでも太一に近付くことができとても幸せだった。

それが顔に出してしまい、太一が去った後ほのかは満面の笑みで涼子を見上げ、そしてまた俯き何か呟いた。

これから、こんな風に笑いたい。

好きな人と一緒にいたい。

純粋な少女の綺麗な想いだった。

「... 10.10」

第2話・・・「寒くねーか？」

「柚は…じゃない、太一くん…教えて欲しいんだけど」

「おうっ。…何を？」

「あの…携帯、番号とメール…」

「なんだそんな事かよー。ちょいと待ってくれな。赤外線ついてつか？」

「あ…うん、はい」

「…よしつと。じゃあメール送ってくれたらゆきの登録すつからさ。ちゃんと送れよ！無視したら絶交だからなー」

「お、送るよ！」

「うふふー、冗談よお。んじゃな、また明日っ！」

「ばいばい…」

「…んで、ラブラブいやんあはんメールしちゃった訳ね」

「な、何それ…違うよ、普通だよ」

またからかわれてる、と思いつながらほのかは必死に否定する。

今は掃除時間なのでほのかは箒をせっせと動かし、涼子にはやにやしなから壁に寄り掛かっている。埃が舞うため窓は全て開けてあった。

「でもさ、あんた結構可愛いんだから太一もグラつくかもよ」

ほのかは涼子のスタイル抜群な体と綺麗な顔を見て溜め息をついた。

「…そんな訳ないよ…だって太一くんは私の事、苗字で呼ぶもん」

「…っあ！忘れてた…」

「え…何が？」

ぽん、と両手を合わせて笑う涼子を不思議そうに見る。

「その、あいつがほのかを苗字で呼ぶって話。あたし昨日家帰って

からスーパー行こうとしてさ、親に晩ご飯のおかず買って来いって言われて。そしたら道で会ったのよ、あいつに！！それで『何でほのかの事名前であげないの』って聞いたら、何て言ったと思う？！」

「え…なんだろ。そこまで親しくないから、とか？」

ほのかがそう答えると、涼子は人差し指を立てて横に振る。

「ちっがうのよー、なんとね…『ゆきのって名前みたいじゃん、だからおれはそれでいーの！それに苗字で呼ぶとなんか気持ちがふわふわすんだよな』だあってさー。このこの！」

そう言つて涼子は、ほのかの赤く染まった頬をひっぱった。完全に照れてんな、ほのかってば可愛いのだ。

「でも太一、恋愛沙汰には疎いからねえ…重度の鈍感よ、あいつ」それはほのかにも何となく分かつていた。太一は女の子とは誰とでも喋るからよく悲しい思いをしていたし、今まで何回も告白されてきたのに全部断つていたのを知っているから。

「片想いつて大変だなあ…ねえ、涼子ちゃん」

「何言つてんのよ、ほらもう掃除終わりだし帰ろ帰ろ！」

強引に引つ張つていかれたほのかの頭の中は、太一の事でいっぱいだった。いつもの事だが。

「や、やつぱ帰るよー」

「だめよ、もうすぐそこなんだから。ほら、あの青い屋根の家っ！」はしゃぎまくりの涼子はほのかを捕まえた腕を離さない。ずんずんと進んでいる。太一の自宅へと向かつて。

「だって迷惑だよきつとー…って、ああ！」

ほのかの言葉は無視して涼子はベルを鳴らした。そしてほのかを見ると、何かを期待しているような顔でにやりと笑った。

「はいはい………ゆきの？！と、涼子…」

「やほー太一」

ドアからひょっこりと顔を出した太一に、涼子は明るく声をかけた。ほのかはする事がなく、恥ずかしさのため下を向いている。

「あのさ、ちよつとほのか預かってくんない？」

「ん？それってどーいう事だ？」

「本当はあたし達ちよつと寄り道してく予定だったんだけどさー、また母さんに買い物頼まれちゃって…でもほのかんち、七時におばさん帰って来るまで家開かないんだって。だから三時間一緒にいてあげてよー」

ほのかと涼子と二人で買い物に行けばいいのに、という考えは、ほのかの頭に浮かんでも太一の頭には浮かばなかった。

「んん、そーなの？そーいう事なら全然OKだからあがつてけ！」

太一が手招きをすると涼子は腕をやつと離し、ほのかの背中を優しく押した。

「よかつたねほのか！んじゃ頼んだよー、またねっ」

邪魔者はさつさと退散、とほのかの耳元で囁くと、笑顔でどこかへ行ってしまった。

「ほらよつ茶あだ！たくさん飲めよお前、遠慮はいらねーからさつ
「あ、ありがとう…」

正直、太一の部屋のあまりの綺麗さに驚いていた。広くはないがよく整頓されている。その部屋の中央にある小さな青いテーブルの上に、コップが一つだけ置かれた。

「あの…」

「ん？」

ほのかの向かいに太一が座ったものだから、とつさにコップに手を伸ばして少し飲んだ。

「太一くんのお茶は、いいの？」

「いーよ、おれ今そんなに喉渴いてねーんだ」

いつもの調子で笑う太一を見て、ほのかは首を振って言った。

「私だけ飲んでると悪いんだもん…」

「そんな事にすんなよー」

「…これ、飲む？」

そう言つて、自分が持っているコップを前にだす。所謂間接キスとかいうやつかな、とほのかはぼーっと考えていた。

「そーかあ？なら、ちよつとだけなあ…はい、さんきゅ」

ついつい太一の唇に目がいってしまふ。太一がそれを飲んだのを見た時、急に恥ずかしくなつて俯いてしまった。

「ご、ごめんね！急に來たりして…」

「いーのいーの！ただちよつとびくりしたけどなあ」

太一は笑顔で喋り続けた。ほのかは終始赤面していたが、確かに幸せだと思っていた。

「送つてまでしてくれて、ありがとうね…」

「いーって事よ！夜道は危ねえしなっ」

すっかり暗くなつてしまい、電灯がささやかに辺りを照らしているだけとなった。そんな時太一はほのかを家まで送っていくと言いだしたのだ。太一の優しさ故の行動だった。

「寒くねーか？」

「ん…ちよつと、寒いかも…でもたぶん大丈夫」

「はは、どつちだよー」

太一の笑顔を見ると心が暖くなる。もつと好きになる。

その時、ほのかの右手をなにかが握った。それが太一の手だと気付いた時にはパニックになった。太一の顔を見上げたが、暗くてよく見えない。

「女の子は手を冷やしちゃダメなんだって」
それはお腹…。

口にしてしまいそうになつて、直前で呑み込む。

初めて触れた、好きな人の手。それはとても暖かくて、うっとりしてしまふ程気持ちよかった。

「…ありがとう」

「おうっ」

こんなに素敵な人、他にいないよ。
近づく度に好きな所が増えていく。

もっと、もっと。

好きになりたいよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8735a/>

「あなたじゃなきゃ、だめなの」

2010年10月11日18時16分発行